

---

# 春と秋

まるは

---

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

春と秋

### 【Nコード】

N8880Y

### 【作者名】

まるは

### 【あらすじ】

怒りのために命を捨てようとした娘と、それを拾った男。男が彼女に教えてくれたのは「ぶつとばし方」だった。

大きな町の「外」で暮らす、二人の物語。

とりあえず、1章完結方式で2章くらいの長さの予定。気が向いた時に増えるかも、くらい。

## 千の秋 0

時は、仁大皇帝じんたいの御世。

東は東疎とうその地から、西は間奈留まなるの果てまでをひとつとした、大神おおか来むらという国があつた。

多くの戦乱を経て統一されたその国は、その頃の名残で各町は大きな壁で囲まれ、人々はその中で生活をしていた。

田畑までも内包する巨大な町は、外敵を完全に遮断し、長い籠城にも耐えられるように作られているため、よその町へ行く用がない限り出る必要はない。

一生を、町の中で終える者も数多くいる。

他の町へ行く時は、役所へその旨を申請し、許可証をもらわねばならない。

ならず者を、町の中に入れないようにするためである。

では、町の外に住んでいる者はいないのか。

答えは 「いる」、だ。

山や海での生活を生業とする者。

よその地から、移民してきた者。

町から、何らかの理由で許可証なしで出て行った者。

彼らは、「外」の人間として、厳密に「内」とは違う法体系の中に置かれることとなる。

これは、そんな町の「外」に住む者の物語。

## 千秋 1

「だめだ、だめだ！ 許可証を持たぬ者を、入れることは出来ん！」

ぬうと立つ門番二人は、千秋ちあきの前に立ちふさがっていた。

標準よりも小さい16歳の少女にすぎない彼女からすれば、彼らは鬼のように大きく恐ろしい者に見える。

しかし、通してもらえないからと言って、「はいそうですか」と、回れ右出来ない理由が、千秋にはあった。

「どうしても、内町うちまちのお役所に、申し上げたいことがあります。それさえ終わればすぐに出ますので、どうかお願いします！」

大男の背にそびえるのは、門。

その門の両側に広がる、高い高い石組の壁。

堅牢な壁で覆われた、守られた町。

千秋は、その中にどうしても入らなければならなかった。

粗末な着物を帯一本で縛りつけただけの、貧乏農民の末娘である彼女は、鼻緒のちぎれた草履を手に持ち、門番の頑なな心を何とか緩めようと必死に訴える。

対する門番は、この国の軍では一般的な、鑄造された量産型の兜と鎧を身につけている。防具だけでなく、槍まで持っている。

兜のてっぺんから伸びているひれは、色あせた緑色だ。

元々は鮮やかな緑で、西域を担当する軍の所属であることを表していた。

この町の治安を維持するために、中央から任を与えられた者たちだ。

彼らより身分の高い者からの命令、あるいは相当な額の賄賂でも積まない限り、彼らの心を動かすことは難しいだろう。

だが、その両方を持ち得ない千秋は、ただ懸命にお願いするしかないのだ。

「だめだと言っておるだろうが！」

すがりつこうとする千秋を、門番はいともたやすく跳ね飛ばした。

軽い彼女の身体は、まるで毬のように放り出され、地面にすっ転がる事になる。

身体のうちこちが痛むが、千秋はそれでも諦めきれない。

立ち上がり、門番にもう一度懇願しようとした時。

「これ以上、我々の手を煩わせると、本当に容赦しないぞ」

門番は、手に持った槍を構える素振りを見せた。

千秋は、さすがに躊躇した。

ここで、自分が死んでは誰が役所へ訴えるのか。

だが、引き下がっては、結局同じことになる。

千秋は、着物の袂たもとから、手紙を引っ張り出した。

彼女の父が書いたものだ。

役所に訴えたいことの仔細が、ここに記されている。

自分が入れなくとも、この手紙が届けば何とかなるかもしれない。

「では、これを役所の方に渡してもらえませんか？」

紙を手に入れるのも難しい中、何とか用意したものである。

しかし、門番二人は顔を見合わせ、嫌そうな表情を浮かべてみせるではないか。

「軍人を、タダ働きさせる気か？」

告げられた言葉は、堂々と賄賂を要求するものだった。

人はともかく手紙は入れてやらないでもないが、タダでは駄目だと言っているのだ。

千秋は、上に立つ者の中にひどい人間がいるのは知っていた。

下の者を虐げ、踏みつけることなど何とも思っていない人種だ。

だが、そんな人間ばかりではないと、心のどこかで思ってもいたのだ。

何故なら、幼少の時に過ごした町では、偉い人の中にもいい人がいたのを見て来たから。

だが、千秋の前に立ちふさがるこの軍人たちは、平民よりほんのちよつとだけしか偉くないにも関わらず、腐りきっている。

ギリと、奥歯を噛みしめて、彼女は怒りを喉元までせり上がらせた。

次に彼らが言うことを、千秋は知っている。

「まあ、そうだな。金がないって言うんなら……身体で払ってもいいぞ」

視線が、彼女の身体を舐めるように動いた。

痩せて、凹凸など皆無に等しい彼女の、こんな鳥ガラのような身体であっても、そんな目で見る事が出来るのだ。

ああ。

どこも、同じだった。

千秋は、手紙を握りしめて怒りにわななく。



喉元でとどめていた怒りが、いまにも唇から炎のように飛び出しそうになるのを感じながら、彼女は一步踏み出していた。

こんな世になんて。

「お金の代わりに、私の命を差し上げます……」

こんな世になんて　未練なんかない。

千秋は、門番に向かって駆け出した。

反射的に突き出される槍の先に。

彼女は。

飛び込んだ。

千秋の世界は、一瞬にして目まぐるしく変化した。

自分の身体が突然一回転し、鈍く激しい音と共に地面に落ちていたのだ。

地面に尻もちをついたまま、彼女はほけつとその光景を見ていた。

自分と槍の間に立つ、炭を背負った後ろ姿。

槍の穂先はへし折られ、千秋の足元に力なく落ちていく。

わなわなと震えている軍人たちを放置して、その人は千秋の方を振り返った。

「怒りは、そんな風に使うもんじゃないよね」

明るくあっけらかんとした声の、糸目の男がそこにはいた。

## 千の秋 2

「ありがとうございます」

千秋は、おそるおそる礼を言った。

山の中腹にある炭焼き小屋らしき粗末な家は、建てられている場所こそ違え、自分の家を彷彿とさせる。

煮炊きに使われるだろう囲炉裏に火が入れられると、疲れきった身体がほっとするのが分かる。

「お礼なら、もう何度も聞いたから、もういいよ」

桶の水を鍋に入れ、糸目の男はそれを囲炉裏へと吊るす。

門の前で大立ち回りをしでかしてしまった彼と千秋は、すぐさま門番に取り押さえられそうになり、慌てて逃げ出したのだ。

千秋が逃げたというよりは、この男に手を引つ張られ、付き合い合わせたと言った方がいいか。

いざ、町から離れてしまうと、千秋は途方に暮れてしまった。

目的を果たすことも出来ず、死ぬことも出来ず、不完全燃焼の怒りの行き先はどこにもなくて、本当に生きた屍のように突っ立ってしまったのである。

そんな千秋の頭に、糸目の男はぽんぽんと手を置いてくれた。

「とりあえず、僕の家に行こうか」

魂が抜けたままの彼女の手を、炭を背負った男が引っ張って行ってくれる。

きっと、彼は町へ炭を売りに来たのだろう。

町だけでは賄えない商品を売る者は、町に入る許可証を得ることが出来る。

おそらく、彼はそれを持っていたに違いない。

なのに、千秋の無謀な事に飛び込んできてしまったせいであんなことになり、しばらくは町への出入りは出来ないだろう。

とぼとぼと手を引かれて歩きながら、少しずつ正気に戻ってきた千秋は、目の前の男に申し訳ない思いでいっぱいになった。

「どうして……止めたんですか？」

助けてもらって余計なお世話と言いたくはなかったが、結果的には男にとっても千秋にとっても良い結果にはなっていないように思えた。

「言っただろう？ 怒りの使い方を間違えてるって……あそこで君が、怒りに任せて死んだって、ただの犬死にじゃないか」

握られた手に、少し力がこもった。

背はそれほど大きい訳ではないが、男の手は大きく、そして温かだ。

悪い人ではないのだろう。

いや、きつといい人だからこそ、無謀な千秋を身体を張って止めてくれたに違いない。

ただの犬死に。

それは、心のどこかで分かっていた。

自分の死など、あの軍人たちの心を動かす材料にはなりはしないのだ。

もう片方の手に握った父の手紙を、千秋はもつとぎゅっと握りしめた。

「10年くらい前から、外村そとむらがたくさん作られ始めたんです」

千秋は、炭の背に向かって呟いていた。

彼の背は、俗世の人のように思えなかったのだ。

貧しい者も助けてくれる、聖人が菩薩の化身ではないかと。

「新しく土地を開墾して田畑に変える。開墾した者に土地は与えるということ、内町うちまちに住んでいた次男坊の父は、喜んでその外村作りに参加しました」

千秋が、小さい頃の事だ。

内町に人が増えすぎ、食料の自給が困難になってきたため、国はその両方を同時に解消するべく政策を立てた。

内町の人手を外に出し、彼らに農地を作らせるという方法だ。

ただで土地が手に入る。

それは、跡を継がない次男以降の男たちの、心を動かすものがあったようだ。

家族を連れて彼らは外に出て、苦勞して苦勞して田畑を開墾し、そしてそこに作物を実らせるに至った。

だが、政策には無責任な部分があった。

国は、新たに開墾した田畑から、面積に応じての一定の税金を取り立てることのみにしか興味がなかったのだ。

新たに出来た外村の秩序や治安は、全て地方の権力者を村長むらおきに据えて、彼らに任せたのである。

確かに、土地はそれぞれの者に与えられたが、同時に村長は重税も課した。

とても、家族が食べて行けないほどの税の重さだ。

外の村は壁に囲まれていないため、人々を守るために強い者を雇わなければならないという理屈で、国のものとは別に税を徴収した

せいである。

雇われた荒くれ者たちは、治安を守ると同時に、彼ら自身が治安を乱す種となり、ちよつとでも逆らう家があれば、ひどい目にあわされることとなった。

更に、農民の足元を見るかのように、こつ言い放つたのだ。

『税金が納められない者は、娘を納めよ。娘を納めた者は、向こう2年の税を減免してやろう』

農民たちは、怒り狂った。

反乱を企てた。

だが、彼らはそれを予見していたのか、『不穏な動きをしている輩について報告した者も、1年の税を減免してやる』とも言ったのである。

そのせいで、他の村人を売る者が出た。

元々、開墾のために集まった者たちであり、古くからの付き合いがあるわけではなく、一枚岩ではないところを狙われたのだ。

こうして、村は横のつながりも断たれ、誰も信じられない状態になっていき、ついには食うものに困って娘を差し出し始めたのだ。

こうなると、未来は暗く閉ざされたものとなる。

圧制を覆すことも出来ず、かといって、娘の数にも限りがある。

餓死者が出たり、逃亡者も出たりする。

耕す者のいなくなった土地には、また何も知らない内町の人間たちが、騙されて連れてこられるのだ。

横でつながれないのならばと、千秋の父は内町の役所へと窮状を訴える直談判の手紙を書いた。

それを、家にいる最後の娘に託したのだ。

最後の娘。

それは、もし一家が重税に押しつぶされそうになった時に、姉たちのようにあの家に差し出され、慰み者にならねばならないということ。

そうなる前に。

父の手紙を持って、千秋は走った。

一番近い内町まで丸一日、握り飯一つと川の水だけでようやくたどりついたのだ。

結果は、ひどいものだったが。

そして、死にそこなった千秋はいま、糸目の男と向かい合っている。

怒りの余り、この世を見限った彼女の前にいるのは、菩薩の化身



なのだろうか。

ゆっくりと鍋の湯が沸いていくのを、千秋は見るともなしに見ていた。

「思ったんだけどね」

毛先の跳ねたざんばら髪を、男は一度かきまわした。

声は、至って明朗だ。

千秋の村の不幸な窮状を聞いてなお、そんなものに振りまわされる様子などない。

そして。

「悪い奴は、ぶつとばしていいと思うよ」

あっけらかんと、とんでもないことを口にしたのだった。

### 千の秋 3

「ぶっ……とばす？」

思わず、千秋は頓狂な声で返してしまった。

余りに明るく、しかしひどい内容を聞いたからである。

「そう、ぶつとばす」

ぎゅつと拳を作って、男はにこにここと笑う。

彼女は、思わずその拳を見つめた。

それは、この人がぶつとばしに来てくれるということだろうか、と。

彼は炭焼き職人のようだが、非常に強い力を持っているように見える。

本当に間近だった檣から彼女を引きはがして転がしつつ、その穂先をへし折ったのだから。

糸目の男が本気になったら、少々相手など本当にぶつとばせそうだ。

「ああ、違っよ」

千秋の瞳に浮かびかけた、希望のようなものを見て取ったのだろ

うか。

彼は、ぱつと自分の拳を解いた。

「拳でぶつとばすのは……」

にこにこしながら彼は、指でちよいちよいとこちらを指してくる。

そう、千秋の方を。

思わず、彼に差されている先を見た。

それは 自分の右手だった。

手を開いて閉じて、それからもう一度男の方を見ると、うんうんと頷いている。

「そうそう、ぶつとばすのは……君の拳で、だよ」

時が止まる、瞬間だった。

考えたこともないことだったし、出来るとも思えないことだ。

千秋は、ただの農民の娘に過ぎない。

村に圧政を強いる屋敷に乗り込んだところで、拳一発当てることも出来ないのは明白だった。

「で、できま……」

「出来るよ。死ぬ気になれば、出来る」

否定の言葉は、より強い肯定に飲み込まれる。

はっと、声に引き寄せられるように、彼を見た。

笑ってはいるが、冗談ではない。

明るくはあるが、茶化してはいない。

彼は、本気で言っているのだ。

「ぶつとばし方は……そうだね、僕が教えてあげよう」

糸目の目を更に糸にしながら、彼は千秋に微笑んでくれた。

そこから、千秋と『糸目先生』の付き合いが始まった。

誰に習ったのだろう。

糸目先生は、武道の心得があつた。

しかも、自分より大きい者を簡単に転ばせることが出来る、まるで魔法のような技だ。

千秋は、何度もその身で練習台となり、気づいたら地面にすっ転

んでいる羽目となる。

この技を会得できれば、彼女も大男相手に怯む必要もなくなるかもしれない。

そんな夢を、千秋は彼の技に見た。

一度は捨てた命なのだから、血のにじむ努力をすれば、一撃浴びせられるかも、と。

死ぬのは、その後でも出来る。

そう彼女は、開き直った。

のだが。

「うひゃあ!」

千秋は、奇妙な感触に飛びあがることとなる。

いつの間にか後ろに回った糸目先生が、千秋の両脇から手を回し、彼女の胸に触っていたからだ。

「せ、先生！ 何するんですか!」

反射的に肘鉄を食らわし、彼から離れながら、着物の前を必死で合わせる。

ときどきとびくびくで、自分の全身が震えているのが分かった。

彼もまた、こんな鳥ガラの自分をそういう目で見るのかと衝撃を覚えていたのだ。

肘鉄を食らったところで、大して効いていない顔の糸目先生は、ふうとため息をついた。

「君は、男たちの中に乗り込んで行くんだよ。みんな真正面から、正々堂々と戦ってくれるわけじゃないじゃないか」

正々堂々とししか聞こえない明快な声に、千秋は全身で納得した。

あの無法の男たちであれば、何でもやるに違いない、と。

彼は、それを千秋に教えようとしてくれているのだ。

どんな卑怯な手にも、彼女が動じないように。

「わ、分かりました、先生！ 疑って済みませんでした！」

ぎゅっと両の拳を作って、彼女はどんな仕打ちにも耐える決意を、改めてしたのだった。

「あー、いや……その……」

先生は、何故か少しバツが悪そうに何かを言いかけたが、「さあどうぞ」と、千秋がぺったんこの着物の胸を差し出す様を見て、大笑いを始めてしまう。

「せ、先生？」

いつものにこにこではなく、ゲラゲラと笑い転げる様は、彼女を  
啞然とさせた。

「いやいや……悪い悪い。ちょっとふざけすぎたね……まあでも、  
その意気だよ」

親指を立てて笑顔を向けられても、千秋には何のことやら分から  
ない。

はあと曖昧に答えながら、彼女はそれから加わった、先生の性的  
な嫌がらせにも耐えつつ修行を重ねるのだった。

「おは……よー」

『よー』のタイミングで尻を撫でられる。

真後ろに立たれるまで、近づいて来ているのに気付かずに、千秋  
は何度となく尻を撫でさせてしまう。

『おは』という二言葉分の猶予があるにも関わらず、避け切れない  
のは自分がどんくさいからだろうか。

こんなことでは、まだまだ男をぶつとばすことなど出来はしない。

頑張らなきゃ。

千秋は、夜な夜な修業の流れを頭の中で繰り返しながらも、疲れ  
に耐えかねて、かくりと眠ってしまうのだった。

そうして何日も過ぎるに従って、彼女は糸目先生のことを心から

信じられる人だと分かった。

彼が本気になれば、彼女の貞操など紙くず同然である。

なのに、先生はまったく千秋に手を出さなかった　修行の時は別として。

言われた通りに出来なくても、彼は声を荒げたり怒ったりしない顔の構造と声のせいかもしれないが。

ただ、じつくりと粘り強く、そして時々性的な嫌がらせで千秋に悲鳴をあげさせながらも、余り深刻にならないように修業を進めてくれた。

力技の武道ではない分、人の動きや流れが大事で、とにかく糸目先生と向かい合った。

先生が、わざと力で押してくる。

その手をひねり、一回転させて倒すのだ。

急所の勉強もした。

手数を少なく、相手を倒す技。

千秋は、多くの男を同時に相手にしなければならなくなる。

それを見越して、最低限の力で相手を動けなくさせていくのだ。

先生は、どうしてこういうことを知っているんだろう。



それ以前に。

どうして、自分に教えてくれるんだろう。

千秋の中に、そんな疑問がふわりと浮かんで、そして消えていく。

先生のことを知りたいと思ったが、知った先に何かがあるわけでもないことにも気づいてしまったのだ。

ひどい男をぶつとばせたところで、千秋がそのまま村に残り続けられるわけもない。

村を出たところで、彼女に行く宛てがあるわけでもない。

ぶつとばした後、男たちに殺されるか、村を出てのたれ死ぬか。

結局、最後はそんなものだろう。

そんな千秋の沈む考えは、長くは続けられない。

いつの間にか背後に回った先生に、「隙だらけだね」と、太ももを撫で上げられていたからだ。

「ひゃー！」

どうして、情けない悲鳴が反射的に出てしまっただろうか。

## 千の秋 4

糸目先生が、箆<sup>たんす</sup>笥を漁っている。

夕餉を終えた時間、囲炉裏で燃える炎だけで探し物は大変そうだ。

手伝おうかと千秋が立ち上がりかけた時、「あつたあつた」と、先生は何かを引っ張り出した。

「はい」

差し出されたのは、赤地に白い花の描かれた着物。

晴れ着ほどの美麗さではないが、普段使いにしては良い物だと分かる。

「え？」

差し出された女物のそれを、反射的に受け取ってしまいながらも、千秋は意味が分からずに先生を見上げる。

「あげる。ちょっと大きいかもしれないけど、おはしよりで調整出来るよね」

にこにここと、あっけらかんと。

ただ「あげる」ために出した以外の何の思惑もなさそうな、幸福が絵になったような笑顔。

菩薩のようだと思ったこともあるが、千秋はここ数日は少し考えを改め始めていた。

彼は、人である、と。

悩みや苦しみが無いなんて、人にはありえない。

いまはこんな風に、笑顔を浮かべている彼であつたとしても、過去もまたそうだったわけではないのだ。

事実、こうして筆筭から女物の着物が出てくる。

ここに、女性がいたということの証拠。

先生は、年齢が分かりにくい顔をしているが、十代なんてありえない。おそらく二十代後半くらいではないだろうか。下手したら三十代。

女性と暮らしていたとしても、何らおかしくはなかった。

その女性が、いまはどうなったかは分からないが、少なくとももう彼の元にはいないのだ。

「こない物……もらえません」

先生の悲しい部分に触れた気がして、千秋はついそれを押し返そうとした。

これを着た自分を見て、彼は昔を思い出してしまうのではないかと思つたのだ。

「討ち入りする時に着てよ。思い切り綺麗に着飾って、ぶつとばしておいで」

なのに。

先生は、愉快でしようがないという風にケラケラと笑うのだ。

千秋が、この着物で男をぶつとばしている姿を、想像しているのだろうか。

そっか。

彼女は、着物を見つめた。

そっか、死に装束にくれたんだ。

女として生まれて十六年。

一番のよかった頃と言えば、幼少の内町住まいの時だった。

商家の次男坊だった父は兄の店で働いていて、身内びいきの援助の入った給金のおかげか、それなりの暮らしが出来ていた。

その頃は、姉たちのおさがりではあるが、千秋もよい着物を着ていた気がする。

これを着て、死ぬならいいか。

最後の最後に、力を貸してくれた先生に見守られて死ぬるように

感じた。

先生の昔の女性への悲しい思いも、それと一緒に死ぬといい。

「ありがとうございます、私、頑張ります！」

ぎゅっと綺麗な着物を握りしめ、彼女は糸目先生を見上げた。

「あー……なんか、また変な事考えてるでしょ」

そんな千秋に、彼は苦笑いを浮かべていた。

「あの着物、着ないの？」

相変わらず、着たきりスズメのボロ着物で鍛錬に励む彼女に、糸目先生が問いかける。

「はい、あれは一張羅ですから。大事な最後に着ま……うっひゃ！」

返事が終わる前に撫でられる尻に飛びあがりながらも、千秋はその手を掴んで一回転させていた。

ほとんど体重を感じないほど、とすつと彼は落ちる。

わざと技をかけられたのだと分かるほど、それは静かだった。

さすがです、先生。

性的な嫌がらせから技の終わりまで、きつと頭の中で台本が出来上がっているのではないかと思えるほど、素晴らしい流れだった。

逆に、その台本のために、まったく鳥ガラな身体を触らなければならない先生が、かわいそうに思えるほどである。

ご愁傷様、と言うべきか。

もらった着物は、確かに彼の言うように少し大きかった。

おそらく、千秋よりも肉づきのいい女性のものだったに違いない。

さぞや先生は、彼女の身体に触った時に、悲しい気分を味わっているだろうと思えたのである。

だが、これでも少しは肉がついてきたのだ。

ここの食事は、主に山菜や先生が捕まえてきた鳥や獣の肉。

外村にいた時とは比べ物にならないほど、おなかいっぱい食べられていた。

家族のことを考えると、後ろめたく思うほど。

死んだ気になって戦う修行に明け暮れるはずの千秋だったが、ここは余りに居心地が良すぎる。

死と等価交換したのならば、ここは修羅の道でなければならな

ったはずなのに、先生は明るくて優しいし、食事もおいしい。

足りないものなんて、何も気にならないほど、ここは幸せだった。弱い心が、彼女の足を引っ張っている。

この先にある、いつか必ず来る修羅の道を避けたいと思うんだ。

それは、この幸せな時間が産みだした弊害でもある。

だが、千秋は行かなければならない。

父のため家族のため、犠牲になった姉たちのため、自分も身を捧げるつもりだったのだから。

そして。

「うんうん、そろそろ及第点かな」

地面に転がったまま、先生がにこにこして言った。

転がした千秋は、それを少し茫然としながら聞いていたのだ。

ついに、その時が来た、と。

## 千の秋 5

夕方の冷たい山川の水で、身を清める。

泥や埃と共に、俗世の全てを洗い流すように。

食生活の改善のおかげで、少しだけふくらんだように思える胸を、千秋は皮肉に見下ろした。

綺麗になった身体を、糸目先生にもらった着物で包む。

髪を結いあげ、山の赤い実のついた枝をかんざしにして差して止める。

新しい草鞋は、自分で作ったもの。

長い枯れ草を、よってこしらえている時、心は静かだった。

怒りとか憎しみとか、確かにあったはずなのだ。

薄れてなくなったわけではない。

だが、それは違うものに姿を変えて、自分の心の奥底に座っている気がする。

草鞋をはいて、千秋は小屋へと戻った。

ちょうど夕餉の仕度をしていた先生が、「おかえ…」と言いかけて言葉を止める。



いつも小汚い姿ばかり見せていたので、きっと驚いたのだろう。

馬子にも衣装と言うところか。

「……」

静かな静かな夕食になった。

だが、寂しい夕食じゃない。

千秋は、目の前に座る先生の顔を時々見ながら、笑みを向けられると、自然に笑みで返していた。

まるで。

この一瞬だけは、何十年も連れ添った夫婦のよう。

糸目先生は、そんなことを言われても困るだろうが、彼女にとってはそれがたとえ疑似的なものであったとしても、必要なものと思えたのだ。

あるはずだった、誰かとの未来。

それを、ささやかに千秋は体験することが出来たのだから。

食事と片付けが終わって、改めて彼女は囲炉裏の前で先生に向き直った。

きちんと正座をし、そして両の指先を板張りの床につく。

「これまで、どうもありがとうございました。命を救って頂いたこと、教えていただいたこと……感謝は言葉に尽くせません」

いまこうして、静かな気持ちでいられるのもまた、先生のおかげだ。

彼は、憎しみの戦いは教えなかった。

いつも冗談混じりの性的ないやがらせをしながら、千秋の肩を抜いてくれた。

おかげで、短い間だったが、生き延びたことを後悔せずに済んだ。

無為に槍に飛び込んで死ぬような、後ろ向きな死ではなく、自分のまっすぐな心のまま正々堂々とぶつかっていく、前向きな死の道を選ぶことが出来た。

全て、この炭焼きの男のおかげである。

彼が何者であろうとも、この感謝の心は変わりはない。

「……」

真剣な気持ちだが、伝わったのだろうか。

頭を下げているので表情は分からないが、先生は何も言わないでいてくれる。

「私に何か出来ることがあれば、恩返しがしたいのですが……」

とくんと、自分の胸が跳ねる。

心のどこかで、奇妙な覚悟があった。

ここでもし、彼が自分を女として求めるようなことがあれば、それを受け入れようと。

いや。

心のどこかで、それを願っていたのだ。

この人になれば、最初で最後の女の身の自分を、捧げても構わないのではないかと。

静かな静かな時間が流れる。

パチと囲炉裏の炭がはぜ、小屋の外をわずかな風が吹き抜け、戸をカタカタと揺らす音が、とても大きく聞こえるほど。

「存分に……ぶつとばしておいで。それが、僕の願いでもあるよ」

糸目先生は、最後まで素晴らしい人だった。

俗っぽい女の身よりも、彼女がやろうとしていることの応援をしてくれるのだ。

分かっていたことだった。

千秋は、ゆっくりと顔を上げて彼を見た。

糸目でよく表情が分からないながらに、やさしく微笑んでくれている気がする。

「はい、ぶつとばしてきます」

さようなら、先生。

さようなら。

千秋は、夜も明ける前に起き出して、最後にもう一度布団に横たわる糸目先生に深く三つ指をつくと、そっと小屋を出たのだった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8880y/>

---

春と秋

2011年11月29日19時50分発行